7月末、ナプサさんが避難センターで出会った幼い兄弟。マラウィ避難民支援は今後も続けます。

ビラーン通信 91号

2017年10月25日発行

NPO法人ビラーンの医療と自立を支える会
（英文名略称・ＨＡＮＤＳ）
本部：〒227-0033 横浜市青葉区鴨志田町516-11
TEL & FAX:045-500-9151
E-mail: hands-mindanao@nifty.com
http://hands-mindanao.a.la9.jp/
郵便振替口座　00210-5-72693
（加入者名）ビラーンの医療と自立を支える会

顔の見える国際協力・次世代につなぐ活動
― グローバルフェスタに参加して ―

毎年10月６日の「国際協力の日」前後に実施される「グローバルフェスタ」。今年は９月30日と10月１日に開催され、海外支援の市民組織（NGO）と政府機関合わせて266団体が参加しました。また、約12万人が入場したという発表がありました。

私たちも毎年出展していますが、日比谷公園から臨海地区のお台場に移って３年、入場者の年齢層が下がったためか、中高年層に好評のティナラク織バッグ等があまり売れなくなりました。費用対効果の点で、参加見合わせの意見もありましたが、グローバルフェスタは特に入場者が多く、市民、特に若い世代に、SDGs（注）に向けた行動を訴え、顔の見える国際協力活動への参加を呼び掛ける上では貴重な機会です。展示用パネルの整備など、広報活動に重点を置くということで、出展を決めました。

SDGs：地球環境と人々の暮らしを持続的なものとするため、すべての国連加盟国が2030年までに取り組む17分野の目標。極度の貧困と飢えをなくすだけでなく、生産と消費の見直し他先進国が直面する課題も含む。

フェスタ当日、開場30分前にブースに着くと、私たちとテントを共有する学生主体の団体「わぴねす」では、インドでのハンセン病回復者の自立支援やワークキャンプ活動のパネル展示作業を終えていました。私も数十年前の学生時代、ハンセン病で視力を失った方々の点字本作りの会に関わり、今も後輩と共に駿河療養所を訪問することもあり、「わぴねす」も駿河療養所訪問が国内活動の一つとのことで、奇縁を感じると共に「わぴねす」の広範囲な活動を知りました。私の昔の訪問経験等も熱心に聴いてくれ、早稲田大学から始まり、他大学にも広がった「わぴねす」の活動は、着実に後輩に、次世代に繋がっていくと心強く思いました。

一方で、私たちは20年、30年と地道に支えて下さる多くの会員、市民の皆様のおかげで、ハンディクラフト事業、初等教育の普及、栄養・衛生面の改善などで一定の成果をご報告できるようになりました。しかし、まだ植えた苗木の見守りや、カレッジ等の専門教育に対するニーズへの対応などの課題が残っているなか、活動を引き継ぐ若い世代の参加が望まれます。

約30年前に、新聞記事をきっかけに、「チボリ国際里親の会」の活動に参加した時のことを思い返してみました。月2000円で、学校へ行けない子どもたちが、教育を受ける機会を得て、苦境から脱することができるならばという気持ちとともに、経済大国の仲間に入った日本の若い世代に、同じ地球上で生きる人々、特に子どもたちの苦境を共感してほしいという思いがありました。

当時は地理の教師として、大気や地殻の動きが地球規模であると同様に、経済活動のグローバル化にも触れたりしていました。「日本が大量輸入したラワン材の乱伐で、森が消えて、チボリ民族は生活基盤を失った。教育を受けていれば、騙されて土地を失うこともない」の記事は絶好の教材と考えました。世界最大の木材輸入国・日本とミンダナオ島先住民族のつながりを「チボリの里子」で伝えることにしました。

その後、鉱山やプランテーション開発で窮状におかれたビラーン民族に出会い、1996年に当団体を設立した頃にはすでに教職を辞していて、教壇から伝える機会はなくなりましたが、グローバルフェスタには設立２年目から毎年参加してきました。今「伝える」手段は、ホームページのほか、ツイッターやフェイスブック等のSNSの時代に入りました。しかし、対面して伝えるイベントはこれからも大切にしていきたいと思います。（山崎）